

# 大阪港における港湾施設の色彩設計プロセスに関する研究

秋元 洋輔

キーワード：色彩景観、港湾環境色、色彩設計プロセス、歴史の変遷

## 1. 研究の背景と目的

天下の台所として川筋の拡張や舟運とともに発展してきた大坂の湊口には、蔵屋敷の白壁を背景に、紅の吹流しを付けた新綿番船と、それを操る水夫たちの赤い半纏姿が行き交う水運の風景があった。時代が進むにつれて、帆船は汽船へ、蔵は近代倉庫へと、都市産業の発展を支える場所として港の風景は変わり続け、青い空と青い海に囲まれた寛大な環境は、経済性や効率性を優先した大規模な建築開発を受け入れてきた。非日常的な都市空間像を追い求めた結果、混沌とした景観も生み出されてきたが、水運の歴史とともに育まれてきた大阪港には、残り続けた色彩が存在しているはずである。そこで、現在の港湾景観を見直し、港湾施設の外装塗り直し事例を対象として、見失った地域固有の色彩や設計コンセプトを把握し、景観色彩の設計手法を示すことを目的とする。

## 2. 港湾環境色の調査と分析

大阪港の色彩景観は、陸上の港湾施設や大規模構造物、海上を往来する船舶やコンテナなど、塗装の色によって大部分が構成されている。工業塗料の色彩は無数にあり、港で使用できる色彩の許容範囲は広く、逸脱した色彩も出現しやすいため、大阪市では色彩景観計画ガイドブックを発行しているが、ネガティブチェックに留まり誘導性の低い景観施策となっていた。現地調査と文献調査に加え、行政や民間会社へのヒアリングを行い、港湾景観を構成する要素（船舶・コンテナ・橋梁・クレーン）の褪色剥落する前の塗装データや引き継がれてきた色彩設計コンセプト、歴史的な倉庫建築の意匠や大阪市の公共上屋色彩計画など、色彩景観に関する様々な情報を収集し分析することによって、大阪港の素地となる色を形作っていく色彩景観計画のあり方について考察している。

## 3. 天保山客船ターミナルの色彩設計

天保山客船ターミナルの外装塗り直しプロジェクト（2010年5月～12月）に関わり、デザインコンセプトや色彩を提案するために行った対象地の調査と大阪市港湾局の意思決定から塗装工事完了に至るまでのプロセスを色彩設計の実践事例として記述している。新たに建築をつくり自己主張に走るのではなく、周囲の環境も港湾景観を構成演出している要素として“図”と“地”の関係を整理し、デザインの条件を集めた範囲内で色彩を検討していくことが重要である。現場にはマニュアルだけでは対応できない様々な要素が存在しているが、“地”となり背景に溶け込む「見えないデザイン」を実現するには、可視化された色彩設計のプロセスが先行事例の役割を担い、地域固有の色彩となるまで引き継がれるようなマネジメントを実践していくことが望ましいと考えられる。

## 4. 結論

かつて港を彩るものは布地や建材の色で、自然素材しかなかった時代、港に賑わいを与えるものは民衆の衣装柄や建築物に描かれた商紋であった。素材に色を塗ることによって港の表情は変わってきたが、空と海は不変の要素として、海上の船舶が主役であることに変わりはない。船舶の色彩設計は防錆・識別・美観などに基づいており、その慣習が長い間守られている一方で、建築色彩が港の景観を構成する要素の中で最優位に立つことは難しく、確立された色彩設計手法は存在しない。橋梁やコンテナ埠頭の色彩を受け入れる立場として、建築物は背景になることが求められており、各々の関係性を見極めたうえで色彩設計に取り組む必要がある。船舶・コンテナ・構造物に使用される色彩は低明度高彩度のものが多く、これらの色彩に追従した場合、“図”となる景観を失う可能性がある。ただし色を拒否した消極的な白色を用いることは、建築物の存在感を増すばかりでなく、地色を無として扱うことにつながる。すなわち、場所で育まれた色彩を丁寧に紐解き、地域固有の色相を見つけ出すことが重要であり、さらに景観要素の関係性と色調をつなげていくことによって港湾施設の色彩は決定される。